# あの日に帰りたい第一章第三話

サウス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あの日に帰りたい第一章第三話

【Ｎコード】
Ｎ６５１８Ｍ

【作者名】
サウス

【あらすじ】
高校一年時にタイムスリップした私は動揺したまま、故郷の街中へ向かった。

# 第一部

新聞の日付が私にもたらした衝撃は計り知れないほどのものだった。「これは夢だな。」私はそう思い込んだ。しかし、まとわりつく湿気とうだるような暑さがこれは現実であることを示していた。「ちょっと、戻りすぎ」私はこの状況に文句を言った。私は9年くらい戻れば良かったのに。幸いなことに、なぜか服装はパジャマではなくて、Tシャツとジーパンだった。私は街中へ向かおうと川を渡る橋へと歩いた。

私は静岡県の静岡市に生まれて、父親がサラリーマンではなく、自営というか、自由業者だったので、転勤というものがなく、生まれてから高校卒業までの18年間を静岡市で過ごした。私は郷土愛がとても強く、いつかゆっくりと田舎に帰りたいと思っていた。その願望の強さもこの事態を招いた一因だったのかもしれない。

私はうだるような真夏の日差しを受けながら橋を渡った。

そして夕暮れ時になって、私はようやく繁華街にたどり着いた。

## あの日に帰りたい第一章第四話

新聞の日付が私にもたらした衝撃は計り知れないほどのものだった。「これは夢だな。」私はそう思い込んだ。しかし、まとわりつく湿気とうだるような暑さがこれは現実であることを示していた。「ちょっと、戻りすぎ」私はこの状況に文句を言った。私は9年くらい戻れば良かったのに。幸いなことに、なぜか服装はパジャマではなくて、Tシャツとジーパンだった。私は街中へ向かおうと川を渡る橋へと歩いた。

私は静岡県の静岡市に生まれて、父親がサラリーマンではなく、自営というか、自由業者だったので、転勤というものがなく、生まれてから高校卒業までの18年間を静岡市で過ごした。私は郷土愛がとても強く、いつかゆっくりと田舎に帰りたいと思っていた。その願望の強さもこの事態を招いた一因だったのかもしれない。

私はうだるような真夏の日差しを受けながら橋を渡った。

そして夕暮れ時になって、私はようやく繁華街にたどり着いた。

## 第一章第五話（前書き）

透明人間になった私は、空腹を覚えた。そこで・・・

## 第一章第五話

繁華街へとたどり着いた私は、奇妙な事に気づいた。行き交う人々と視線が全く合わないのだ。皆、私の存在に気づいていないようだった。というか、本当に私に気づいてないのだ。どうやら私はここでは透明人間らしい。都合が良いことに服も一緒に透明になっている。少しずつ要領が飲み込めてきた私は、空腹を覚えた。

私は困っていた。長い入院生活で現金は持っていなかったし、ましてやこの時代のお金など持ち合わせていなかった。しかし、良く考えてみれば、そもそも透明人間と化した私は普通に飲食店で食事を取ることはできないのだ。私は考えた挙げ句にマクドナルドの廃棄処分のハンバーガーを漁る事にした。なんとかそれで一息ついた私は、国鉄（まだＪＲというハイカラな呼び名ではなかった）の静岡駅の駅ビルに向かい、私の家の方に向かうバスに乗り込んだ。これは透明人間の方が楽だった。バスは懐かしい風景を横目に走った。

## 第一章第六話（前書き）

バスに乗った透明人間の私は、懐かしい我が家へと向かった。

## 第一章第六話

バスは終点の私の家の近くのバス停についた。運転手は透明人間である私に全く気づかず、私は堂々と降りた。私ははやる気持ちを抑えきれず、バス停から走り出した。入院生活で車椅子生活だった私は二本の足で歩くことが念願だった。足の裏から伝わる地面の感触を味わいながら、私の大好きな自宅からすぐ近くの海を目指した。日は落ちて、あたりは暗くなってきたけど、そんな事は構わなかった。私の大好きな海の波音が聞こえてきた。私は溢れでる涙を拭いもせず、立ちつくした。

## 第一章第七話（前書き）

バス停から、私は懐かしい故郷の海に向かって歩き出した。

# 第一章第七話

満月が海の上に浮かびはじめて、あたりは暗くなってきていたが、月明かりのお陰で十分周りが確認できた。私は海岸に降り立った。懐かしい愛して止まない潮の香りが胸一杯に広がった。「私は、こんなに素晴らしいところを捨ててまで東京に出て、一体、何になりたかったんだろう？どうしたかったんだろう？」私は悔恨の涙を流し続けた。

私は海から歩いて5分ぐらいの自宅への道をゆっくりと歩いた。そして懐かしい自宅の前に着いた。透明人間は家に入るのに、苦労しない。真夏だから、窓を開けている一階の和室から家に入った。東京ではかんがえられないくらい、無防備な家だった。一階の台所に行くと、母とまだ幼い妹が遅い食事を取っていた。父は麻雀なのか、いない。私は階段を上がり、自分の部屋へ向かった。

## 第一章第八話（前書き）

高一時の若い私の部屋に上がっていった透明人間の私は、そこで、懐かしい光景を目にする。

## 第一章第八話

妹の部屋を自分の部屋にしてしまった高校一年生の私が、ギターを抱えてそこにいた。羨ましいくらい若い。長年貯めたお年玉を母に頼んで、強引に下ろしでもらい、そのお金で買った、安いエレキギターだ。下手くそなビートルズらしき歌を歌っている。下手くそなギター付きで。私は赤面してしまった。歌は恥ずかしくなるくらいの大声で、数曲熱唱されて終わった。続いて、コードを弾きながら、何か口ずさんでいる。どうやら歌を作って、詞をノートに書き留めているらしい。バカよ。大バカ者だ。あのノートは後で捨てよう。

## 第一章第九話（前書き）

風呂に入りにいった若い私のいない隙に、私は・・

## 第一章第九話

若い私は風呂に行ったらしい。私はその恥ずかしいノートを読んだ。
恥ずかしいフレーズのオンパレードだった。「雨が降ったら気もそぞろ」なんだ、このサザンのパクりのような歌詞は。私は赤面しまくりだった。そこへ階段を上ってくる足音がした。　パジャマに着替えた私が部屋に入ってきた。そしてぶつぶつと何かつぶやきはじめた。「なんで一緒の高校なんだよ。」それは私が高校三年間、忘れられなかった、中学二年の時に別れたみやびのことだった。

## 第一章第十話（前書き）

私はみやびとの別れを思い出した。あれは中学三年の出来事だった

## 第一章第十話

私は、みやびとの別れを思い出した。中学三年の初めのことだったが、まだ覚えている。生徒会活動に夢中だったみやびに私は意味もなく嫉妬した私は、私の幼なじみか生徒会副会長になったのをきっかけに、みやびと彼の間を疑って、私とみやびとの間はギクシャクした。

結局、中三のはじめのクラス替えの時に階段の踊り場に呼び出して、「もう終わりな。」と私は一方的に切り出した。みやびは両目に涙を浮かべて黙って立ちすくんでいた。

## 第一章第十一話（前書き）

みやびとの別れを思いだし、青春のほろ苦い思い出から逃げるように、私は眠りに落ちた。

## 第一章第十一話

私はみやびとの別れを思い出し、青春のほろ苦い思い出に浸った。

気がつくと、高校生は寝ていた。この頃から、私は寝つきが良かったようである。

私も急速に眠気を覚えて、部屋の隅に横たわった。なんだかいろんなことが起こりすぎて、とても疲れた。私は泥のような眠りに落ちた。

物音がして、私は目覚めた。若い私は、夏服の制服に着替えていた。懐かしい姿だった。

朝食を摂りに、階下へ降りていった若い私を尻目にして、私はこれからどうするか考えた。

「せっかく、昔に戻ったのだから、学校に行ってみたいな。」しかし、私の学校は家から自転車で、どんなに急いでも５０分近くかかった。

「こんな時、どこでもドアがあったらなあ。」

私はそんな昔からの願望を妄想した。すると・・・

## 第二章第一話（前書き）

壁にあらわれたドアを開けると、そこは・・・

## 第二章第一話

壁に扉が現れた。私は興味津々でドアノブを回した。そこには便器があった。私は不思議な気分でその便器に近づいた。どこも変わったところのない便器だった。私はまたがったりしたが、空を飛んだりはしなかった。私は首をかしげながら、便器の部屋を出た。

私はトイレのドアを開けて、驚いた。そこはどこか懐かしい場所だった。

私はトイレから外に出てみた。

そこは学校の校舎の廊下のようだった。私は校舎の入り口から外に出た。私は呆然とした。そこは私の母校の自転車置き場と別館の校舎（先ほどのトイレのある校舎）の間の裏は懐かしいが、ヒヤリとした場所でもある。隠れてタバコを吸っていて、危うく先生に見つかるところだった。懐かしい思い出に浸っていると、自転車のブレーキの音が聞こえてきた。そろそろ登校ラッシュの時間らしい。

そして私は、息を飲んだ。みやびが自転車で滑り込んできたのだ。

## 第二章第二話（前書き）

みやびは相変わらず可愛かった。なんでこんなに可愛い娘をフッテしまったんだろう。

## 第二章第二話

みやびは中学の時と変わらず可愛かった。なぜこんなに可愛い子を振ってしまったのだろう。後悔先に立たずとはこういう事を言うのか。しかし私はこの諺を何回使うのだろう。

そんな事を考えて、ボーッとしていたら、若い私が数人の友達と自転車置き場にやって来た。「だろっ。そう思わねえ。」俊ちゃんが大声で話している。懐かしい光景だ。私はなぜか涙が流れてきた。私は学校自体は好きではなかったが、学校の友達は大好きだった。友達とつるんで遊ぶのが好きで、高校三年間は彼女ができなかったが、別に寂しくはなかった。

今になってこの時代を振り替えると、華というか色気のない三年間だった。

やり直せるなら、みやびとやり直したいと真剣に思った。

## 第二章第三話（前書き）

高校三年間、彼女が出来なかった、若い私の愚行を止めるために、私はもう一度どこでもドアを使った。

## 第二章第三話

私はしばし考え込んだ。どうしたらみやびとやり直せるだろうか。なかなか良い考えが浮かばなかった。とりあえず、私が彼女がほしくて、少し良いなと思った同じクラスの女の子に電話をかけまくった愚行をとめなければ、それから次の策を考えよう。

若気の至りをとめるためには、若い自分よりも、先に家に居る必要があった。もう一度別館のトイレに入った。そして家に戻れと願った。手を合わせて願いながらドアを開いた。すると・・・

そこは、高校時代の私の部屋だった。狙い通りの展開に私はガッツポーズをした。透明人間だけど。

## 第二章第四話（前書き）

私の記憶に間違いなければ、若い私は同じクラスの女子バスケット部の子に・・・

## 第二章第四話

私の記憶が間違っていなければ、若い私は同じクラスの女子バスケット部の子に、やはり同じクラスの野球部のMと恥ずかしい電話をするはずだった。

Mは高校一年のはじめごろ仲が良かった。いいやつなのだが、少し熱すぎるやつだった。こいつがやがて野球部のキャプテンになるのだが、それが野球部が弱かった一因だったかどうかはわからない。少しウトウトしていたら、階段を上がってくる足音が聞こえてきた。若い私が
学校から帰ってきたようだ。着替えを早々に終わらせた若い私は、どこかに電話をかけ始めた。

当時は当然携帯電話などなかったが、私の家には一階と二階に電話があり、恵まれていた。どうやらMと話しているらしい。「うん。じゃあ、明日の帰りにおまえの家に寄るわ。」そういって電話を切った。明日か、何とか阻止しなければ。私は策を練り始めた。

## 第二章第五話（前書き）

考えたが、良い考えが浮かばなかった私はとりあえずＭの家に向かった。

## 第二章第五話

考えたが、良い考えは浮かばなかった。昔から良く考えずに行動していた私は、とにかくＭの家に行くことにした。

Ｍの家は学校から１５分位のところにあった。私はどこでもドアでＭの部屋に着いた。私はクラスの名簿を探した。彼は電話かける気、満々で、電話と名簿を自分の部屋に用意していた。「まあ上がれよ。」Ｍの声が階下から聞こえてきた。私は咄嗟に名簿を彼のベッドの下に隠した。「お邪魔しまーす。」若い私の暢気な声が聞こえてきた。

## 第二章第六話（前書き）

Mが電話するのを止められなかった若い私は・・・

## 第二章第六話

Mが電話のまわりを必死に探している。若い私はがそんなMを見て、どうしたのかと声をかけた。「名簿が無いんだよ。」Mは情けない声で応えた。「そんなことだろうと思って、電話番号をメモしてきたよ。」若い私は自慢気に言った。私は昔からどうでもよいところに気がまわった。この頃からかもしれない。私はチッと舌打ちをした。余計か事をしやがって、と自分に腹をたてた。

これこそまさに自業自得というヤツだ。電話をかけながら、Mが異常なほど緊張している。私は段々と詳細を思い出した。バスケ部の女の子にはMが惚れていて私は電話に付き合わされただけだったのだ。

Mが受話器をおいた。撃沈したようだ。「ちょっと、そこまで付き合えよ。」Mが意気消沈した声を掛けてきた。

## 第二章第七話（前書き）

Mに付き合って、無駄な時間を過ごした若い私は、みやびとよりを戻す方法を考え始めた。

## 第二章第七話

Mが付き合えと言ったのは、私がこの時代に現れた河原の土手の対岸あたりだった。そこでタバコを吸いながら、Mの嘆きや愚痴を聞いた。その愚痴も熱かった。あの子もこんな所を敬遠したのだろう。振られるのもやむを得なかったかもしれない。Mに付き合って無駄な時間を過ごしてしまった私は、みやびとよりを戻す方法を考えた。なかなか良い考えが浮かばずに、時間は過ぎ去っていった。季節は夏真っ盛りへと移ろい、名案が浮かばないまま、高校一年の夏休みに突入した。

## 第三章第一話（前書き）

高校一年の夏休みに突入したが、何もなく、若い私は怠惰な日々を過ごしていた。

# 第三章第一話

高校一年の夏休みが始まった。毎日、良い天気が続いたが、何も変化のない日々が続いた。ある日、怠惰な生活にピリオドを打つべく、若い私はある行動にでた。中学の時の名簿を探しだし、みやびの家に電話しようとしたのだ。しかし、昔からあまり深く考えずに行動した私も、さすがにすぐには決断できずに、電話の前で、ウロウロしていた。　だがやがて決心してダイヤルを回し始めた。若い私は、一大決心をしたのか、深呼吸をしたり、指にコードを何回も絡ませて受話器を耳にあて、呼び出し音を鳴らし続けた。携帯電話と違い、家の電話は出るまでに時間がかかった。　三分くらい呼び出し続けたがため息をつきながら、受話器を置いた。頭を抱えて落ち込んでいる若い私のところに、電話がけたたましい音を鳴り響かせた。仲の良い友達の俊ちゃんらしい。「おう、いいよ。」どうやらこちらに来るようだ。私の記憶によれば、あの印象深い夜が始まるはずだ。

## 第三章第二話（前書き）

俊ちゃんがやって来た。くだらない話をしていた私達は、満月に照らされた海へと続く道を歩き始めた。

## 第三章第二話

「お邪魔しまーす。」俊ちゃんの声だった。二階に上がってきて、私の部屋に入ってきて、くだらない話をはなし始めた。おかしい。私の記憶が確かなら、もう一人、太一郎という友達が遊びに来るはずだった。しかし、太一郎は一向に来る気配がなかった。

「ちょっと外に行こうぜ。」若い私は、俊ちゃんを誘った。二人は肩を並べて、昼間と間違えるくらい月明かりで明るい海までの道を歩いた。

満月に照らされて、とても夜とは思えないほど明るい道をどうしようもない話をしながら、私と俊ちゃんは近所の酒屋まで歩いた。二人は用心深くあたりを見回しながら、タバコのマイルドセブンを自販機で買い、続けて、缶ビールを二本買った。そして海で他愛もない話をしながら、ビールを飲み、タバコを吸った。

「そろそろ帰るか。」私はそう言って立ち上がった。そして海岸から私の家に向かう道に出たとき、ライトが一つ、猛スピードで近づいてきた。

## 第三章第三話（前書き）

白バイに追いかけられた若い私と俊ちゃんは逃げた。

# 第三章第三話

「白バイだ。」俊ちゃんが叫んだ。二人は海の手前の海の家が連なる道沿いに走り出した。ライトが近づいてきた。私は道沿いにある松林の中に身を潜めた。透明人間だから隠れなくても良いのだが、条件反射で隠れてしまった。二人は海の家のせりだした入り口の下に隠れた。白バイが猛スピードで走って行った。うまく逃げられたと思った。しかし・・・通りすぎていったと思った白バイが凄いスピードで戻ってきて、海の家のせりだした箇所をヘッドライトで照らしていった。海の家は全部で六軒あるが、私と俊ちゃんが隠れているところは次に照らされる所だった。

ライトの明かりが二人が隠れているあたりを照らした。しかし、そこには誰もいなかった。白バイ警官はチッと舌打ちして走り去った。

おかしい。私の記憶によれば、俊ちゃんと私は、警官に見つかって職務質問されるはずだった。どういうことだ。ここは私の過去の世界じゃないのか？私は何がなんだかわからなくなって混乱した。

## 第三章第四話（前書き）

命からがら白バイから逃げて、部屋に戻った俊ちゃんと若い私は一息ついて、くだらない話をしはじめた。

## 第三章第四話

私は混乱した頭を抱えてとりあえず、家に戻ろうとした。家の前の道を歩いていると、海の家の裏の畑から、いかにも怪しい人の足取りで、俊ちゃんと若い私が出てきた。二人は辺りを見回しながら歩いている。

俊ちゃんがフーッと大きく息を吐いて、「危なかったな。もう大丈夫かな。」と息も絶え絶えにつぶやいた。「うまく逃げられたかな。」私も息を切らしながらつぶやいた。やはりここは、私の高校時代ではないのだろうか？

俊ちゃんと若い私は私の部屋に戻った。そこで二人は馬鹿話をはじめた。話の中身は俊ちゃんがついに初体験を済ませた、という話だった。同じ中学の女の子が夜、俊ちゃんの部屋に来て、良いムードになって、そうなったらしい。

親のいる居間を通らずに、裏口のすぐ横の彼の部屋ならではの話だった。

「いいなー。羨ましい。」若い私は心底羨ましげな言葉を吐いた。私の記憶どおりなら、私がその機会に恵まれるのは、高校卒業時だ。残念ながら。

## 第三章第五話（前書き）

高一の夏休みは何事もなく過ぎていった。

# 第三章第五話

高校一年の夏休みは何もなく過ぎ去っていった。若い私はみやびに再度電話しないで、俊ちゃんの家に入り浸って　いた。おかしい。私の記憶に違いがなければ、この辺で俊ちゃんからバンドを作ろうという、私の高校時代の痛恨の出来事が始まるはずだった。そのバンド活動をするために部活をやめたのだから。

しかし、何もなく夏休み最後の日になった。

夏休み最後の日、相変わらず、家には一人きりだった。母はパートで中学生の弟は部活、小学生の妹は友達とプールに行った。若い私は、電話の前でウロウロして何度もため息をついている。どうやら、みやびに再度電話しようかどうしようか悩んでいるようだった。

私は意を決して、みやびの家の電話番号をダイヤルした。一回、二回と呼び出し音が鳴った。しかし、みやびの家の人は誰も出なかった。十回鳴らして出なかったら切ろうと決めた八回目のコールが終わろうとした瞬間、「もしもし。」と電話に出る若い女の子の声が聞こえた。

## 第三章第六話（前書き）

若い私は受話器を置こうとした矢先の出来事に慌てふためいた。

# 第三章第六話

若い私は受話器を置こうとしていた矢先の出来事にびっくりして慌てふためいていた。

「もしもし。」若い女の子の声だ。みやびだ。「もしもし。おれだけど。久しぶりだね。」私は声が上ずらないようにゆっくりと話した。

「どうしたの。急に。」みやびは冷ややかな声音で応えた。

不思議なことが起きた。私は透明人間のはずなのに、高校一年の私が耳にあてている受話器を通したみやびの声が聞こえたのだ。

それはまるで、高校一年の自分に同化しているかのようだった。しかし、電話しているもう一人の自分は目の前にいる。どういうことだろう。私は混乱したが、もう深く考えるのはやめた。切り替えの早いのが、私の長所であり、短所であった。

# 第三章第七話（前書き）

みやびの冷ややかな声が受話器の奥から聞こえてきた

# 第三章第七話

みやびの声は冷たく、どこかよそよそしかった。「いや、どうしてもみやびの声が聞きたくなって。」間抜けなほどストレートな言葉だった。私は頭を抱えた。「今から出掛けるから。」みやびは冷たく言い放った。若い私はノックアウト寸前だった。

「忙しいのにごめんね。また電話してもいいかな。」破れかぶれの発言だった。「・・・」沈黙の時が流れた。ダメかな、これは。私は絶望感にとらわれた。「いいよ。」予想外の言葉が受話器の向こうから聞こえてきた。「じゃあ、またかけるよ。」私はみやびの気が変わらぬうちに電話を切った。逆転サヨナラ満塁ホームランだ。

## 第三章第八話（前書き）

みやびとの電話を終えた若い私は、やたらと喜んでいた。

# 第三章第八話

電話を終えた若い私は、ガッツポーズを繰り返して喜んでいた。私はそのアホな姿を冷ややかに見ながら、考え込んだ。やはり、おかしい。私は確かに高校一年の夏休みにみやびに電話したが、あっけなく振られたのだ、やはりここは私の過去とは非常に良く似ているが別の世界なのか？　楽しかった夏休みが終えた。特筆すべきことは、私の身長がわずか１ヶ月半で１０センチ近く伸びたことだった。毎日のように会っていた俊ちゃんはさほど感じなかったようだが、久しぶりにあうクラスメートはとても驚いた。このあたりは私の記憶と合致する。

若い私は毎日浮かれていたが、夜になると、電話の前で、ウロウロしていた。モヤモヤした日が続いた。そして９月の終わりの土曜日、私は電話をかけることを決断した。

## 第三章第九話（前書き）

みやびの家には昼間電話することに決めた。

# 第三章第九話

みやびの家には昼間電話した。夜に電話すると家の人が出る可能性が高かったからだ。若い私は祈る思いでダイヤルを回し続けた。また私は不思議な感覚にとらわれて、目の前の若い私と同化しはじめた。

何度めかの呼び出し音の末、「もしもし。」みやびらしき若い女の子の声がした。「あっ、私、」「あたしだけど」私の声をさえぎってみわびが応えた。私のドキドキ感が強まっていった。 胸の高鳴りは苦しくなるくらい強まっていった。「忙しいのにゴメンね。何度も。」「別に忙しくないよ。」クールに返されてしまった。

「あのさ、もう一度会って話したいんだ。」「会ってどうするの？」「あのときのこと、中学のあのときのことについて話したいんだ。」かすかにみやびの小さな溜め息が聞こえた。「今さら会っても仕方ないよ。」みやびは冷たく言った。

## あの日に帰りたい第三章第十話（前書き）

みやびと再度会うことになったことに私は一抹の不安を抱いていた。

## あの日に帰りたい第三章第十話

みやびは頑なに私の誘いを断った。確かに今さら会っても仕方ない、と言われればそれまでだった。しかし、若い私はあきらめきれずに粘った。「いいよ。」何が彼女の心を動かしたのかわからないが、前向きな言葉をもらえた。

「それじゃあ、あの河原はどうかな？次の土曜日？」「わかった。」「時間は夕方の5時くらいにいくよ。」「いいよ。」私はみやびの家の近くの河原にいく約束を取りつけ、有頂天になった。　ついにみやびと再会する日がやって来た。三年ぶりに二人っきりで会える、それだけで若い私は天にも昇る思いでいた。しかし私は一抹の不安を抱いていた。私の記憶ではこんな展開は無かったのだ。私は確かにもう一度みやびに会いたいと思っていた。この世界は私の願望を叶えてくれる世界なのか？遠くから歩いてくるみやびの姿が見えてきた。

## 第三章第十一話（前書き）

みやびの姿が近づいてきた。久しぶりに二人きりでみやびと会える。

# 第三章第十一話

みやびが近づいてきた。中学の時と変わらない肩より少し長い髪の長さもかわっていなかった。「話って何かな？」「あの時のことを、中学の時のあの時のことをあやまりたくて。どうしても会ってあやまりたかったんだ。」「もう、昔の話だから、今さら蒸し返さないで。」「じゃあ、どうして今日会ってくれたの？」「それは・・・あなたの言葉で一度は会ってもいいかな、と思っただけなの。でもあたしが間違ってたね。やっぱり会わない方が良かったね。じゃあね。」

みやびはわずかな時間で帰って行った。呆然と立ち尽くす私を残して。

# 第四章第一話（前書き）

みやびとの呆気ない再会に、腑抜けになった私に・・

## 第四章第一話

みやびとのうまくいかなかった再会の日以降、若い私は腑抜けのような日々を送っていた。かろうじて学校には行っていたが、生きる屍のように無気力だった。

「なあ。どうしたんだよ。」俊ちゃんが聞いてきた「何か、溜まってることは、思いっきり言っちゃったほうが気が楽になるぜ。」「何でもねえよ。」「そうか。ならいいけどよ。あんまり元気ないから気になってな。」「ところで、お前今度の土曜の夜ひま？Ｈの家で飲み会やるんだけど、お前来ねぇ？」「行くよ。絶対行く。」気分転換にはもってこいの誘いだった。

## 第四章第二話（前書き）

本当は、みやびとの悲惨な再会の件を俊ちゃんに話してしまいたかった。

## 第四章第二話

本当は思いっきり、俊ちゃんに吐き出してしまいたかった。いや私は若い私と同化したわけではなかったのでなんとも言えないが、そう思っていたはずである。しかし、若い私は思いとどまった。その選択は今のところ正解である。俊ちゃんはいいやつだが、少し口の軽いのが玉にキズだった。それも誰彼かまわず言いふらすのではなく、仲間うちに話すからたちが悪かった。　土曜の夜がやってきた。この頃は土曜日は学校は休みではなく、半日授業だった。それが休みの日の価値を高めていた。

しかし、私は不安だった。きっとまた、自分の記憶とは違う事が起きるに違いない。Hの家には一度だけ行ったことがあるが、こんなシチュエーションでは無かったし、季節も初夏だった。どんどん歯車が狂って行く。そして私はどうなるのだろう？

## 第四章第三話（前書き）

夜7時に俊ちゃんの家に集まった若い私達は、Hの家に向かった。

## 第四章第三話

夜7時に俊ちゃんの家に行き、他に友達が三人来て、五人でHの家に向かった。Hの家に行くと、さらにHの他に二人いた。他の高校だが、中学が同じらしい。私だけが、違う中学だった。そんなことは気にならなかったが、こんなに人が集まっても、女の子は1人もいなかった。私は部屋の隅で彼らの様子を見ていた。私の記憶どおりなら、面白いことが、もう少しで起こるはずだ。　違う高校のヤツが三人いたが、俊ちゃんの家であっていたので違和感は無かった。私は彼らの様子を興味津々で見ていた。やがて宴たけなわとなり、若い私は俊ちゃんを含んだ五人と酔っぱらってHの家の外へ出た。

## 第四章第四話（前書き）

酔っぱらった若者の集団は外へ繰り出した。

## 第四章第四話

酔っぱらった若者の集団は奇声をあげながら、千鳥足で歩き回った。このままで行くと警察が来るのでは、と、思っていた矢先、白バイがやって来た。酔っぱらい集団は蜘蛛の子を散らすように、急いで隠れた。　若い私は駐車場に停めてあった車の下に、這いながら隠れた。白バイが駐車場に停まった。警官が若い私の隠れている車の方向に近づいていった。白バイ警官は車の下を懐中電灯で照らしながら、誰か隠れていないか、探していた。次に照らされるはずの車の下に若い私は隠れていた。絶体絶命である。

その時、少し離れたところで奇声があがった。警官は声のする方向に歩いていった。若い私は、このチャンスを逃さずに、車の下から這い出し、他人の家の庭先をひどい千鳥足で駆け抜け、フラフラになりながら、Ｈの家に戻った。

## 第四章第五話（前書き）

フラフラになった5人組は何とかHの家に戻った。

## 第四章第五話

フラフラの5人組は、何とかHの家に戻り、Hの部屋で酒を浴びるように飲んでいた奴らと合流した。私の記憶どおりなら、若い私は俊ちゃんに自分の家庭の不遇ぶりを話すはずだ。その話のことで私は高校時代の三年間ずっとからかわれたのだ。　若い私は俊ちゃんにみやびとのことを話し始めた。違う！全く違う。こんな展開は私はまったく記憶にはなかった。どうしてこんな展開になるのだろう。

若い私は俊ちゃんに自分の苦しい胸の内を滔々と話している。半分涙声だ。俊ちゃんはニヤニヤしながら聞いている。そこにOという男が話しに割り込んできた。

## 第四章第六話（前書き）

若い私はみやびとの出来事を俊ちゃんに話し始めた。

## 第四章第六話

Oは大沢といい、私の行きたかった高校に楽々と受かって、高校生活を楽しんでいた。俊ちゃんの家の近所に住んでいたので、よく顔を会わせていた。その彼が話しに割り込んできた。　「早く告白しちまえよ。その方がすっきりするぜ。」「うるせー、そんなことは言われなくてもわかってるよ。」「フラれるのが怖くてビビってんな、このヤロー。」「うるせーなこのヤロー！」若い私は大沢に掴みかかっていった。俊ちゃんはゲラゲラと大笑いしていた。大沢の足や私の手がいろんな奴らにあたり、さほど広くないHの部屋は大乱闘になった。やがて誰かが倒れると次々と皆横になり、やがて狂乱騒ぎの夜は白々と明けた。

## 第四章第七話（前書き）

白々と狂乱騒ぎの夜は明けた。

# 第四章第七話

大騒ぎの翌日は、爽やかな快晴だった。そんな素晴らしい天気の中、Hの家から、慣れない酒を飲んで二日酔いで冴えない集団が、痛む頭を抱えて出てきた。留守にしているHの親が帰ってきたら、家の中の惨状と近所からのクレームに驚き、Hを問い詰めるだろう。可哀想なH。まあ自業自得みたいなものだからな。

しかし、この世界はなんだろう。私の記憶の世界でないなら、パラレルワールドと呼ばれる私が経験した過去と並行して進んでいた世界なのだろうか？だとしたら、私はもう現実に戻ることはできないのか？頭は混乱するばかりだった。

## 第四章第八話（前書き）

この世界は一体なんなのだろう。私は海へ行きたくなった。

## 第四章第八話

少し難しいことを考えたら、頭が痛くなってきた。Hの家を出た私は、海辺に行きたくなり、若い私よりも先に自宅に向かった、自分の部屋からウォークマンを探しだし、大好きなサザンのテープを入れて、海へと向かった。

海は潮が引いて、静かだった。もうすぐ私の好きな夕暮れ時だ。秋の気配が漂い始めた海辺には人影はなかった。　私は昔から何かあると必ず海に行った。海の波音を聞いていると昂った心も静まったものだった。本当に海の近くに住んでいて良かった。あまり尊敬できない父親だったが、海の近くに家を建てた選択だけは称賛に値した。

私はサザンの歌を聴きながら、これからどうしようかと考えた。しかし、考えても、元の世界に戻る方法がわからないからどうしようもなかった。テープから「栞のテーマ」が流れてきて、私は涙をこらえきれなかった。

## 第四章第九話（前書き）

混乱したまま、何も解決せずに秋になった。

## 第四章第九話

混乱したまま、その状態も解決しないまま、時間だけが過ぎて行った。

秋も深まったある日、若い私は俊ちゃんや友達４～５人で街へ繰り出した。私の故郷には、繁華街が一つしかなく、休みや休みの前の日には、そこへ出かけることが多かった。しかし、お金もなかったので、ブラブラ歩いて過ごすことが多かった。

その日俊ちゃんが珍しく金を持っているので、喫茶店へ行こうと言った。この言葉が次へのステップを生んだ。

若い私達は、何度か入ったことがあるカフェ・バーと言う所へ入った。四人がけのテーブルに五人で座った。みんな同じ一番安いコーヒーを頼み、他愛もない話しに興じていた。

その時、私は透明人間の私を見つめている視線に気づいた。

## 第五章第一話（前書き）

透明人間の私を見つめている視線は窓際方向からだった。

# 第五章第一話

その視線は窓際ではしゃいでいる女子高生らしき集団のほうからだった。やたらと声の大きな女の子の後ろにこちらを凝視している女性がいた。二十代後半といった雰囲気か？

その女性がこちらへ歩いてきた。そして私の前に立ち、「あなたも時のはざまに落ちてきたの？」と涼しげな声で聞いてきた。　女は幽霊のようではなく、明るく、活発な感じの女性だった。「どんな風になって、ここへ来たの？」「あたしの場合は、男にフラれて、家で泣きながら飲んでいて、そのまま寝ちゃって、目覚めたら、この街のあのデパートの前にいたの。」「君はいつぐらいにこの世界へ来たの？」「半年ぐらい前かな。」「ほかにも俺たちみたいな人はいるのかな？」

## 第五章第二話（前書き）

女は他にも、この世界に落ちてきた仲間がいることをほのめかした

## 第五章第二話

「いるわよ。」女はあっさりと答えた。「私はここに来てから、三人会ったわ。」「四十代のおじさん二人とあたしと同じ二十代の女の子。探せばまだいるかもね。」「みんなここであったのかい？」「ううん。ここで会ったのはあなたが初めて。他の人はみんなあのデパートの前で会ったけど。」あのデパートが一つの鍵なのだろうか？　あのデパートとは静岡市に三軒しかないデパートのうちの一軒、西〇百貨店のことだった。現在はもうなくなってしまったらしいが、その当時は繁盛していた。しかし、私はちょっと考えた。もし、そこで元いた世界に帰れたとして、私は本当に元の世界に帰りたいのか？長く付き合った彼女にフラれ、病気で車椅子の世界に。私は激しく悩んだ。

## 第五章第三話（前書き）

とりあえず急いで帰る術もなく、そんな理由もない私は問題を先送りすることに決めた。

## 第五章第三話

とりあえず今のところ、帰る術は無いので、急いで現実の世界に帰る理由も無いので、その悩みは忘れることにした。あまりいつまでも悩まないのが、私の長所でもあり、短所でもあった。

しかし、結論を先送りしようとした私に彼女は冷水を浴びせた。「あたしがあった時のはざまの人の一人が言ってたんだけど・・・」次の彼女の言葉が、また激しく私を動揺させた。　「その人が言うには、こっちへ来てから一年以内に現実の世界に戻らないと、二度と元の世界に戻れなくなって、ずっと、時のはざまにいることになるそうなのよ。」彼女は大事な事をさらっと言った。「君はもう帰る方法を見つけたのか？」私は焦って聞いた。「あたしは無理して戻りたいと思わないのよ。だから帰る方法も知らない。」そういう考えもあるな、と私は考え込んだ。

## 第五章第四話（前書き）

私は、女に他の時のはざまの住人に会った場所を聞き出した。

## 第五章第四話

「君は他の、時のはざまの人達とは、いつ会ったの？」「つい最近では、一週間くらい前かな？そういえば土曜の夜に会うことが多いわね。」「君が会った人の中で、元の世界に戻った人はいたのかな？」彼女は少し考え込んだ。そして小さな声で「いるわ。」と呟いた。　彼女はそれ以上詳しい事は知らなかった。私はしばし考え込んだが、あのデパートの前に行ってみることにした。今日は土曜日なので、今夜、他の時のはざまに落ちた人達と会えるかもしれなかった。丁度、若い私達は店を出るところだった。

「今夜、あのデパートの前に行ってみるよ。」私は女に伝えた。

「そう、あたしも気が向いたら行くわ。　」そう言って私達は別れた。

## 第五章第五話（前書き）

私は時のはざまに落ちて、帰る方法を知っている人間に合うために、あのデパートの前に行くことにした。

# 第五章第五話

いつもの土曜の夜がやって来た。若い私達のグループは、俊ちゃんの家に帰っていった。また、どうしようもない夜を過ごすのだろう。私は街のメインストリートにあるマクドナルドの前にいた。マックの前には、行き場のない少女達や、そんな女の子達をナンパしようとする男達がたむろしていた。私はそこにしばらくいたが、街の時計が夜１０時になるころ、私はあのデパートへ向かった。　あのデパートと呼んでいた、西〇百貨店の前に来た。ポンと肩を叩かれた。昼間会った彼女だった。「やっぱり来ちゃった。」「来ると思ってたよ。」私は彼女と肩を並べて、デパートのシャッターが降りた入口付近で待った。３０分ほど立ち話をしながら待ったが、誰も来なかった。「今日は来ないか。」私は帰ろうとその場を立ち去りかけた時、「来たわ。」彼女が小さな声をあげた。

## 第六章第一話（前書き）

時のはざまに落ちてきて、現実世界との間を行き来した男と出会った私は・・・

# 第六章第一話

そこに表れたのは、四十代半ばくらいの眼鏡を掛けた男だった。「また会いましたね。」男は低い声で彼女に話しかけた。「そうですね。１０日ぶりくらいかしら。」「そちらの方は？」彼は私の方を指差した。「今日の昼間、喫茶店で会ったの。まだ、時のはざまの世界に来て、日が浅いみたいで、あなたたちの事を話したら、とても興味を示したの。」「いきなりですみません、でもいろいろと教えて欲しくて。」男は眼鏡の奥で警戒した眼差しを向けてきた。

## 第六章第二話（前書き）

「この世界に来てから、どのくらい経つの？」眼鏡の男は聞いてきた。

# 第六章第二話

「この世界に落ちてきてから、どれくらい経つの？」眼鏡の男は、おもむろに聞いてきた。「七月の下旬だから、丁度、三ヶ月くらいです。」「それで僕に何を聞きたいの？」男は神経質そうな目で私に聞いてきた。その声音が私を少し苛立だせた。生理的に苦手なタイプの男だった。「元の世界に戻る方法を教えてください。」「その方法を聞いてどうするの？帰った世界は貴方がもともといた世界とは違うかもよ。」眼鏡の男は、そう冷酷に告げた。確かにその可能性は高いと私は考え、返事に詰まった。

「まあ、今はまだ帰るのは無理だな。こちらに来て半年以上経ったら、もう一度ここに、このくらいの時間に来なよ。その頃、教えてあげるよ。」そう言って眼鏡の男は立ち去った。

## 第六章第三話（前書き）

眼鏡の男は高飛車な話し方をする男だった。

# 第六章第三話

眼鏡の男は高飛車な物言いだった。しかし、今は彼と喧嘩している場合ではないので、そのまま別れた。　「なんかいけすかない言い方をする男ね。」「俺が気に入らなかったんだろう。」「役に立てなくてごめんね。」「君のせいじゃないから、気にしないで。」そんな話をしながら、彼女と別れた。これからどうしよう。途方に暮れながら私も家路についた。　季節は秋から冬へ移ろうとしていた。私がこの世界へタイムスリップしてからもう五ヶ月が経とうとしていた。

しかし、この五ヶ月は驚いてばかりだった。やはりこの世界は、私が体験してきた人生と平行進化した世界なのだろうか、そうだとしたら、私は元の世界に戻ることは難しいのだろうか？重大な選択をしなければいけない時が近づいてきていた。

## 第六章第四話（前書き）

クリスマスと年末が近づいてきた。一年で一番心が沸き立つ時期だが、この頃は、そうでもなかったらしい。

## 第六章第四話

クリスマスと年末が近づいてきた。大人になって忙しく働くようになってからは、一番心沸き立つ時期になったが、この頃はそうでもなかったようで、若い私はあまり浮かれていなかった。

この頃の若い私は、みやびのことを忘れようと、同じクラスの、良いなと思った女の子にすぐに電話をかけては、フラれ続けた。若い私は、心が荒んでいった。　振り返ってみると、この高校一年の時は良くフラれた。こういう所は、私の記憶どおりなのだ。嫌な記憶である。

あんまり数多くフラれたので、女の子に対して、告白する勇気はついた。自慢することではないが、後で社会人になって考えると、物怖じしなくなったのも、この頃の経験のおかげかもしれない。まったく、自慢にはならないが。

## 第六章第五話（前書き）

年末が過ぎ、冬休みも終わるころ、単調な日々に少し動きがあった。

## 第六章第五話

結局、クリスマスも年末も何事もなく、過ぎていった。私は少し焦りはじめた。焦ってもなにも解決しなかったが。

冬休みが終わるころ、少し動きがあった。

いつものように、俊ちゃんの家に遊びに行ったときのことだった。「オレ、バンド組もうかなと思ってんだ。」小さく、俊ちゃんがつぶやいた。

これが私の運命を混乱させる言葉になった。「オレもそのバンドに入れてくれよ。」若い私は何も考えずに、迷うことなく叫んだ。「別にいいけどさ。お前なんか楽器出来んの？もう、ベースとドラムは決まってんだ。後はボーカルぐらいか？」「オレにボーカルをやらせてくれ！」自慢ではないが、私はまったく楽器など、弾けなかった。はじめからボーカルしかできない男だったのである。しかも、別に歌がうまい訳ではなかった。前途は多難だった。

## 第六章第六話（前書き）

俊ちゃんに他のバンドのメンバーを聞いてみた。

# 第六章第六話

俊ちゃんに他のバンドメンバーを聞いてみた。ギターは俊ちゃんと太一郎、太一郎がギターが物凄く上手く弾くという話しは以前から聞いていたから、不思議は無かった。ドラムはゴリポン、俊ちゃんと同じ中学で私や俊ちゃんと同じ硬式テニス部だったから、良く知っていた。素晴らしく、体格の良い奴だった。ドラムは初めてというか、音楽も初めてらしい。

そして、ベースはコージ、こいつも俊ちゃんと同じ中学で、私達と同じ高校だが、入学してすぐに盲腸で入院したついていないヤツだった。こいつも音楽は初めてらしい。

太一郎以外は不安の残るメンバーだった。

## 第六章第七話（前書き）

正直言って、私は歌は上手い方ではなかった。いや、どちらかと言えば下手な方だった。

# 第六章第七話

正直言って、私は歌はそんなに上手くなかった。いや、おそらく下手な方だったろう。そんな私が何故ボーカルをやろうとしたのか、たぶん、俊ちゃん達と一緒に遊んでいたかったのだろう。女の子にフラれて、俊ちゃん達まで離れていってしまってはあまりにも寂しすぎるから、強引にボーカルに立候補したのだろう。どうせバンドやるなら、サックスにすれば良かったと後年思ったが、その時は、バンドに加わることで精一杯だった。　部活をやめてふらふらしていた若い私はバンドに飛びつき、その活動にのめりこんでいった。私の過去では、バンドはもっと早く結成して、バンド活動をするために、部活をやめたのだったが、こういう所も少しずつ違っていた。これからどんな展開になるのだろうか？

## 第七章第一話（前書き）

バンドという打ち込めるものを見つけた若者達は、毎日を楽しく過ごした。

# 第七章第一話

バンドという打ち込めるものが見つかって、若者達は、毎日を楽しげに過ごした。家にいても楽しくなかった若い私は、叔母の家の近所の（私の家から自転車で２０分くらい。）ラーメン屋でバイトを始めた。時給は４００円だったが、賄いの食事があって、嬉しかった。週末の土曜の午後や日曜日は、太一郎の団地の集会室でバンドの練習に熱中した。毎日が楽しかった。　最初は楽しかったバンドも練習がマンネリ化してきた。私がこの世界へタイムスリップしてきて、半年たったころ、バンドにライブをやらないかという誘いがあった。俊ちゃんが仲良くしている少し年上の人達のバンドのライブの前座だったが、刺激に飢えていた若者達はその話に飛び付いた

## 第七章第二話（前書き）

ライブの場所は、俊ちゃんの家から近い居酒屋のような店の一階だ。

# 第七章第二話

初めてのライブが近づいてきた。俊ちゃんバンドの練習にも、力が入ってきた。日が近づくにつれて、若い私は、緊張の色が濃くなってきた。バンドで練習する曲は、７０年代後半の洋楽、ハードロックばかりだった。ボーカルはシャウトする歌が多かった。ゴリポンはドラムスクールに通い、コージは黙々と練習に励み、２人ともメキメキと力をつけていった。若い私は取り残されている気持ちが強くなっていった。　ライブ当日、ライブの会場は俊ちゃんの家から近い、一緒にやるバンドの知り合いの居酒屋のような店の一階だった。

観客は２０人くらい来てくれた。半分はこちらが招待した客で、残りはメインのバンドの招待客だった。

緊張が高まるなか、ライブが始まった。しかし、若い私は、挫折感が強まったライブだった。違う世界なら、違う結果になればいいのに。こういう所は、記憶に忠実だった。悔しいけれど。

## 第七章第三話（前書き）

初めてのライブはまずまずの盛り上がりだった。

## 第七章第三話

初ライブはまずまずの盛り上がりだった。しかし、若い私は挫折感で一杯だった。勢いでボーカルになったが、圧倒的に力不足だったので、バンド活動が苦痛になってきた。後年、恥をたくさんかくから、格好なんて気にしなければ良いのに。当時は、イマイチな自分はとても恥ずかしかったのだ。私はこのライブ以来、バンド活動から遠ざかっていった。この世界では、これからどうなるのだろうか？　ライブが終わり私は再び、あのデパートの前に行ってみた。やはり、元の世界に戻りたくなったのだ。この前と同じように、土曜の夜に行ってみた。しかし、今回は収穫が無かった。同じ境遇の時のはざまの住人には、例の彼女やあの眼鏡の男にも会わなかった。このまま、この世界に居続けなければ、ならないのだろうか？私は困り果てて座り込んでしまった。

## 第七章第四話（前書き）

バンドの練習からも疎遠になった私は、再び、自堕落な生活に戻って行った。

## 第七章第四話

後、半年でタイムスリップしてから、一年が経ってしまう。ここまでの半年はあっという間だったから、残り半年など、すぐに過ぎてしまうだろう。決断の時は近づいてきた。どうしよう？私は自問自答した。このままこちらにいたほうが、もう一度別の人生を送れるのでは。そんな気持ちが日に日に強まっていった。　バンドの練習から疎遠になっていった若い私は、また元のような自堕落な生活に戻っていった。何をしても中途半端な自分に嫌気がさしていた。かといって、高校デビューでグレる勇気もない若い私は、やり場のない怒りに、毎日、苦しんでいた。　若い私は、海を見ながら、溜め息をつく事が増えていった。

## 第七章第五話（前書き）

この世界に残るのか、もといた世界に戻るのかを決める時が近づいていた。

# 第七章第五話

この世界に残るか、元の世界に戻る方法を必死に探すべきか決める前に、私はどうしても、みやびへの気持ちにけりをつけたかった。ここがはっきりしないと、前へ進めなかった。あの衝撃的な河原での一件から、もう3ヶ月が過ぎた。みやびへの想いは募るばかりだった。　冬休みも終わり、短い三学期に入った。高校一年の時もあと少しになった。二年からは、進路を理系か文系かでクラスが別れる為に、私立文系一本やりの私は、理系に進む、俊ちゃんや太一郎とは別のクラスになる。少しずつ寂しさが増してきた。そんな時、あの話が風の噂で聞こえてきた。

## 第七章第六話（前書き）

その噂とは、みやびが別の男と付き合っているという噂だった。

## 第七章第六話

その噂とは、みやびが他の男と付き合っているらしい、との風の噂だった。私は激しく動揺した。別に私はみやびと付き合っている訳ではないので、誰と付き合おうが彼女の自由だし、みやびが責められるいわれはない。しかし若い私は、どうしても、みやびの口から直接真実を聞きたかった。若い私は、またしてもみやびに連絡を取ろうと決心した。

1月の終わりの日曜の午後、家には相変わらず、誰もいなかった。昔から放任主義の両親は不在で、弟と妹も友達たちと遊びに行った。電話するには、絶好のシチュエーションだった。

私は再び若い私と同化し、みやびの家へとダイヤルした。みやびの家の電話の呼び出し音が耳に鳴り響いた。呼び出し音は永遠に続くように響いた。

## 第七章第七話（前書き）

長い呼び出し音の末に、みやびの家族の誰かが電話に出た。

# 第七章第七話

長い呼び出し音の末に、みやびの家族の誰かが出た。「もしもし。」みやびらしい声だった。「もしもし、俺だけど、たびたびごめん。」「・・・」無言の応答だ。「もしもし、みやびかな？少し話していいかな？」「お姉ちゃんは今、いません。」みやびの一つ下の妹だった。携帯電話がなかった時代の電話はスリル満点だった。私は、またかけると言って、すぐに電話を切った。有りがちな失敗だった。

手痛い失敗電話にも、懲りずに、私は最初の電話から、約三時間後にもう一度みやびの家へ電話した。夜になるまえに電話しないとみやびの両親が出る怖れがあったからだ。まあ、日曜の昼間だから、親がいる可能性は平日よりは高いのだが。私は親が電話に出ない可能性にかけた。

今度は一度の呼び出しで、誰かが電話に出た。「もしもし。僕・・」「あたしだけど」私が名乗る前に、みやびが応えた。「何の話？」氷のような冷ややかな声だった。

## 第七章第八話（前書き）

みやびが電話に出た。若い私は、噂の真相をみやびに聞いた。そして・・・

# 第七章第八話

「あのさ、噂を聞いたんだけど、みやびのクラスの杉下とみやびが付き合っているって聞いたんだけど。本当？」私はおそるおそる聞いた。「そうよ。本当よ。」みやびはあっさりと肯定した。「そうか。はっきりわかって良かったよ。」私はしどろもどろになりながら、涙が溢れるのを堪えて、電話を切った。ひどすぎる結末だった。経験した過去でもフラれて、別の世界でもフラれた。ダメージは大きかった。

二度も同じ女にフラれたダメージは大きかった。私はこの世界への執着心が急速に薄れていくことを感じた。しかし、もう一度、懐かしいあの母校へ行きたくなった。月曜なので、若い私は、落ち込みながらも、学校へ行った。私は、自分の部屋の壁の前に立った。母校へ行きたいと願った。再びどこでもドアが壁に表れた。

## 第七章第九話（前書き）

同じ女に二度フラれたショックで私は、急速にこの世界への執着を失った。そして、元の世界に戻る前に、もう一度、母校に行くことにした。

# 第七章第九話

どこでもドアをくぐると、念じたとおり、懐かしい母校の別館のトイレに現れた。時間は午後3時近く、もうすぐ授業が終わりみんな帰り始めるころだった。テニスコートと自転車置き場の間に佇んでいた私は、帰り支度をして、自転車にまたがる学生達を眺めていた。どうすることもできずに。

溜め息をつきながら、別館のトイレへ向かい、歩き出したその時、楽しげに肩を寄せて歩く、みやびと杉下とすれ違った。そして、二人は笑いながら、私の前を自転車で走り去って行った。私の前に切ない空気を残して。

## 第八章第一話（前書き）

みやびと新しい彼氏の仲睦まじい姿を見て、私は激しく落ち込んだ。

# 第八章第一話

みやびが新しい彼氏と二人で帰る仲睦まじい姿を見て、私は激しく落ち込み、元の世界に戻る方法を真剣に探す決意を固めた。この世界への未練は無かった。冷静に考えると、情けない話である。たかが、女にフラれたぐらいで。しかし、この時はそう冷静になれなかった。私は再び、時のはざまの住人に会うために、街へ向かった。

私は、私と同じようにこの世界へ落ちてきた人と会おうと、あの女性に初めて出会った、喫茶店へ行った。しかし、数時間待ったが、彼女は現れなかった。しようがないので、今日が土曜日ということを思い出して、夜１０時になるのを、あのデパートのシャッターの前で、張り込んだ。しかし誰も現れなかった。私はガックリと肩を落とし帰ろうとした。

その時、誰かが肩を叩いた。「お久しぶり。」あの彼女だった。

## 第八章第二話（前書き）

肩を叩いたのは、あの彼女だった。

## 第八章第二話

「お久しぶり、あれから良く考えたんだけど、やっぱり元の世界に戻る方法を真剣に探そうと思って。」「何で元の世界に帰りたいの？何かこっちで嫌なことでも在って、帰りたくなったの？」鋭い女だった。やはり、私の雰囲気が情けない男モードなのだろうか。「ここに居ても、かわりばえしないからな。だったら、戻れるなら戻ってもいいかな、と思って。」「ふーん。」女は私の言い分などまったく信じていないといった感じで、気のない相槌を打った。

## 第八章第三話（前書き）

元いた世界に帰れるとは限らないわよ、と彼女が言った。

## 第八章第三話

「元の世界へ戻る方法を見つけても、必ず、元いた同じ世界に帰れるとは限らないわよ。それでもあなたは又タイムスリップする方法を探すの？」女は問い詰める口調で言った。

「まるで、一度帰ったような口ぶりだね。」私は少し不愉快になって、女に皮肉を言った。「そうよ。あたしはもう一度タイムスリップしてみたわ。」女は驚愕の事実をさらっと言った。「それじゃ、何でまたこの世界へ戻ってきたの？」私は声が裏返るのを感じながら、女に問いかけた。「それから、同じ世界に戻れるか、わからないと言っていたのに、なんでまた、同じ世界にタイムスリップすることができたの？」私は次々と湧いてくる疑問を女にぶつけた。

「それはどうしてかあたしにもわからない。でもね、あたしに帰る方法を教えてくれてた男の人がこう言ったわ、一度、タイムスリップした場所は戻りやすいって。」女はアッケラカンとした口調で言った。私は答えにくい質問を口にした。「帰った世界はどうだったの？」

## 第八章第四話（前書き）

なかなか話したがらなかった彼女が話始めた。

# 第八章第四話

女はなかなか答えなかったが、やがて少しづつ話始めた。「元の世界にうまいこと帰れたけど、いい世界じゃなかったわ。あたしは男にフラれて、落ち込み、毎日がつまらなかった。透明人間からは戻れたけどね。いろいろと考えて、こっちに戻ることに決めたの。」彼女は辛そうに話した。「そうか。話しにくいことを聞いて悪かったな。」「ううん。気にしないで。で、あなたはどうするの？」「俺も、帰れるかどうか、挑戦しようと思っている。正直に言うと、あんたの話を聞いた時は、最初はやめようかな、と思っていたけど。」「そう。決めたのなら、しようがないわね。だけど本当に元の世界に戻れる保証はないわよ。それにあなたは戻って、幸せになれるの？」女は痛烈な質問を投げかけた。

「それはわからない。でもあの世界が俺の生きてきた証だから。過去を振り返るのはもういいよ。」私は悲壮な決意を彼女に伝えた。

## 第八章第五話（前書き）

私は元の世界に戻る決意を固めて、彼女にその方法を聞いた。

# 第八章第五話

「決心は変わらないようね。」女は吐き捨てるように言った。「ああ。出来たら、タイムスリップする方法を教えてよ。」彼女は小さくため息をついて言った。「その方法は意外と簡単よ。そこのシャッター脇の地下街へ降りる階段を下りながら、元の世界へ帰りたいと念じるのよ。そこで目眩が起きれば、タイムスリップするわ。」私はシャッター脇の階段を凝視した。「行くの？」女の声が響いた。私はゴクリと唾を飲んだ。　私はシャッター脇の階段の前で、足を踏み出して、階段を降りるかどうか、迷っていた。「やっぱりやめたら？戻ってなにかいいことあるの？」「それはうまく帰れたら、それから考えるよ。この世界も面白いけど、透明人間はやっぱり、生きている手応えがないな。苦しいけど、現実感があるほうを選ぶよ。俺は。それじゃ。」「うまく帰れるように祈っているわ。さようなら。」私はその階段を降り始めた。

## 最終話（前書き）

私はシャッター脇の階段を降り始めた。

## 最終話

私は、階段を降りながら、元の世界に戻れるように願った。やがてかすかに足元が揺らぎはじめ、私は立っていられなくなり、階段にしゃがみこもうとした。しかし、階段がゆがみはじめ、周りが極彩色の風景に変わった。私は奈落の底へ落ちていった。　目眩は続いた。私はこのまま、ふらつき続けるのでは、と思った。私は目をつぶり、それと同時に意識が薄れていった。私は深い闇に落ちていった。

目が覚めると、私は、あの入院しているリハビリ病院のベッドの上に横たわっていた。起き上がろうと身体に力をいれたが、左手と左足は自由には動かない。どうやら、元の世界に帰れたらしい。私は傍らにあった車椅子に乗り移って、顔を洗いに行った。元の世界は、あのタイムスリップした世界に比べて、悲しいくらい不便だった。でも、これが私の選んだ道だった。私は懸命に生きて、人生を切り開いていく。まっすぐに。　～第一部　完～

## 最終話（後書き）

お読み頂きありがとうございます。自分が不自由な身体になって人生をやり直せたら、どの時点が良いだろうと思って、この話を書き始めました。第二部は近日中に書き始めます。また、良かったら読んでください。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6518m/

あの日に帰りたい第一章第三話

2010年10月13日09時59分発行